

農業従事者と留学生の接触場面に関する一考察 —農業体験活動における調整行動に注目して—

市嶋 典子

要 旨

本研究では、母語話者である農業従事者と留学生の接触場面での相互行為を、調整行動という視点から分析することで、母語話者と非母語話者との対等かつ互恵的な関係づくりに資する言語活動空間はいかなるものかを考察した。

分析の結果、農業体験活動中の調整行動として、母語話者による「農業体験の文脈、物、言葉の関連付け」、「易しい言葉への言い換え」「エピソード、物、言葉の関連付け」、「身近な話題の提供」・「話題への感銘」、非母語話者による「話題の修正」・「話題の提供」が抽出された。また、農業体験活動中、母語話者と非母語話者という境界性を感じさせない対等な関係性に基づく環境が構築されていたことが明らかになった。このような言語活動空間の形成を可能にしたのは、農業従事者に底流する、農業への誇り、非権威的な人間観、他者に対する不断の興味、これら人生観が留学生との接触場面に影響を与えていたためであることを主張した。

【キーワード】：自然接触場面、調整行動、母語話者と非母語話者の境界、対等性、人生観を問い合う教育

1 はじめに

日本語教育において、接触場面は、「日本語母語話者－非母語話者外国人」の特殊な言語場面である「外国人場面」（ネウストプニー 1981）として知られるようになった。接触場面においては、母語話者は言語ホストとして会話に参加し、非母語話者は言語ゲストとして参加する役割をなしているとされる（ファン1998）。一方で、日本語母語話者＝教える側、非母語話者＝教えられる側といった二項対立的な関係性の構図が批判され（田中1996、春原1999）、母語話者と非母語話者との対等な関係の構築を目指した相互学習型活動が提唱されるようになってきた。しかしながら、「対等」な関係性の構築を標榜する相互学習の場においても、実際には、母語話者と非母語話者の境界線が引かれており、結果として非母語話者の会話からの排除に繋がっている問題点が指摘されている（OHRI2005）。このような排除関係を乗り越え、双方が対等な立場で参加できるような日本語学習環境はどうすれば構築できるのだろうか。

本研究は、秋田県仙北市で行われた「第三の故郷を見つける農家民泊」というプログラムにおける、一泊二日の農業体験活動を分析対象とする。この活動後、筆者は、参加留学生にインタビューを行った。インタビューで、参加者の一人サラ（仮名）は、「あー、分からない時。言葉の境目みたいが、出てしまうんです。その、境目によって、あの、伝えるのは難しいと思います。（中略）でも、その家族は、本当に伝えたかった、ので、その気持ちが出てこなかったです」と述べた。ここでは、もてる言語資源に格差がある場合、母語話者と非母語話者と

の間では境界ができがちだが、この活動においてそうした境界はなかったという認識を参加者が持ったことが示されている。

従来の接触場面研究では、優れたコミュニケーション方略をもつ母語話者とは、外国人との接触経験の量・質が高い者とされてきた(岡崎・一二三1995, 柳田2010)。しかし、本研究の活動においてホストをつとめた農業従事者は、外国人や外国文化との特別な接触をもっているわけではなかった。にもかかわらず、なぜ母語話者／非母語話者の境界を感じさせない相互の伝え合いが可能になったのか。

本研究では、母語話者である農業従事者と非母語話者である農業体験活動に参加した留学生の接触場面での相互行為を、調整行動という視点から考察することで、母語話者と非母語話者との対等かつ互恵的な関係づくりに資する言語活動空間はいかなるものかを提示する。

2 分析対象フィールドと分析対象データ

本研究の対象フィールドは、2012年11月3日・4日に行われた「第三の故郷を見つける農家民泊」という活動である。本活動は、秋田県内で学ぶ留学生が農業体験を通じ、随一の地場産業である農業と農家の暮らしを体験的に理解するとともに、農家の方の話から、仙北市西木町の魅力を認識し、本活動後も再び同地を訪れるような継続的な関係づくりを目指した。留学生はグループに分かれ、引率者とともに農家に1泊2日で宿泊した。分析対象データは、本活動の一部であり、農業体験中の談話データ(約16.5時間)と、農業体験に参加した3名の留学生へのインタビューデータ(約3時間)を文字化したものである。また、活動の観察記録(活動後に記述したもの)も参考にした。

なお、参加者の属性は、非母語話者4名(女性2名, 男性2名, 国籍は, 台湾, タイ, モンゴル, イスラエル, 滞日期間は1ヶ月～2年), 母語話者4名: 農業従事者夫婦, 引率者の牲川, 市嶋)である。

3 分析

3.1 分析方法

本研究では、農業体験に参加した非母語話者である留学生と母語話者である農業従事者、引率者の牲川, 市嶋の相互作用に注目し、調整行動という観点から分析する。

岡崎(2003)は、協働の形成過程において相互調整行動が行われるとし、相互調整行動を次の3種類に分類している。(A)意味に関わる相互調整行動: 母語話者・非母語話者の間で、共有されていない単語については双方で意味を確認し合っていく諸行動である。具体例を挙げて言い換えたり、そのために中断した談話を修復したりする。(B)理解に関わる相互調整行動: 理解の確認, 不理解の表明や先行話者の発話の理解が合っているかの確認を行う。(C)話題に関わる調整行動: 身近なトピックの選択, 抽象的な話題が会話の維持を難しくすると判断された場合, 身近で「今, ここ」に当たる話題を優先して取り上げる, とする。

今回の分析対象データにおいては、これら三つの調整行動がすべて見られたが、本研究では、対等かつ互恵的なコミュニケーションを成立させるための調整行動として、特に(A)意味に関わる相互調整行動, (C)話題に関わる調整行動を取り上げる。

なお、非母語話者である参加留学生については、全て仮名で、ユー(モンゴル), ポー(タイ),

サラ(イスラエル), リン(台湾)と記す。母語話者である農業従事者夫婦については, 農業体験中, 参加留学生達にお父さん, お母さんと呼ばれていたことから, 「父」, 「母」と記す。また, 「・・・」は聞き取り不能部分を示し, 「??」は聞き取り不明瞭部分を示す。

3.2 分析結果

3.2.1 意味に関わる相互調整行動

意味に関わる相互調整行動においては, 母語話者による「農業体験の文脈, 物, 言葉の関連付け」, 「易しい言葉への言い換え」「エピソード, 物, 言葉の関連付け」という調整行動が見られた。以下は, 農業体験を終え, 皆で体験を振り返りながら語り合っている場面の一部である。

事例1 農業体験の文脈, 物, 言葉の関連付け

父：これーをね, 全部, さっきね, あの, 覚えてる, あの, 腐ったの??トラクターの?積んであったでしょ。これが, これが殻なの。この中に実が入ってる。

ポー：はい。

父：みんな生きてるんだ。

牲川：あー。

ポー：生きてる。

父：うん, いくら乾燥してもね, 生きてるの。

牲川：ふーん。

父：これをね, あのー, んとー, 来年使うときにね, ……てくれる? これもう少し

牲川：うんうんうん。

父：あのね, これーを, あのーとっておくの。種, 種っていうの種。

ポー：・・・種。

父は, 農業体験中に留学生達とより分けた籾殻を持ち帰っていた。そして, 「これーをね, 全部, さっきね, あの, 覚えてる, あの, 腐ったの??トラクターの?積んであったでしょ」と述べ, 留学生達に体験を想起させた上で, 籾殻を見せ, 「みんな生きてるんだ・・・種, 種っていうの種」と説明し, これらが命を持つ種であることを説明した。このように, 父は, 単に種という言葉の意味を説明するのではなく, 留学生達が理解しやすいように, 「農業体験の文脈」と「物(籾殻の中の種)」と「言葉(種)」を関連付けて説明していることが分かる。

事例2 易しい言葉への言い換え

父：はい, うん。種子といいます。

牲川：うん。

ポー：しゅす?

牲川：しゅし

父：しゅーし。

ポー：しゅし。

牲川：うん。

父：というの。

牲川：ま, 種ですかね。

父：・・・種子

ポー：はい。

父：種, 種の子供。

父は, 籾殻の中の実が「種」であることを説明し, これを「種子といいます」と説明している。さらに, 「種子」という語彙を留学生達が理解しやすいように「種の子供」と易しい語彙に言い換えていることが分かる。

このように, 父が, 留学生達との間で共有されていない言葉の意味を, 実際の農業体験の文脈と結びつけたり, 実物を見せたり, より易しい日本語に言い換えたりしながら理解をうながし, 共有していこうとする調整行動が多々見られた。

事例3 易しい言葉への言い換え

ポー：名前ありますか。

父：これは, これ名前ありますよ。

リン：何? あはは。

父：あの一民芸品っていう。民芸品。

ポー：みんげい,

父：民芸品ってわかる? 民芸品。

牲川：Folk,

父：うん。

牲川：なんだろ。

父：いろいろあの一, 民芸品っていうのはあの, 昔からあの一, なんていうのあの, その

牲川：Folk

父：手, 手作業

母：日本語正しく言えば, こちらが, ちゃんと

父：民芸品で, あの,

牲川：(笑)

父：よくあの, おみやげ売り場にあるじゃない, 小さい,

ポーが, 農業体験の中で, 父に教わりながら藁で作成した飾りの名前を尋ねると, 父は「民芸品」と答えた。民芸品という言葉になじみがない留学生達は, あまりピンと来ていない様子であった。父は民芸品について, 昔からある手作りのもの, おみやげとしても売っているもの, と言い換えて説明するが, 留学生達には今ひとつ伝わらなかった。

事例4 エピソード, 物, 言葉の関連付け

母：これは,

牲川：あ、かわいい。

母：昔は、

リン：あー！

母：全部藁で作ったの。

市嶋：これ、お母さんが作ったんですか。

母：家の、わた、私の祖母、

牲川・市嶋：おー、あー、

母：になる人が作った。

市嶋：おばあさんが作った。

母：明治前に。

牲川：わ、へー。ふーん。

ポー：おー。

リン：んー。

牲川：かわいー。

サラ：んー。

牲川：ほんとに

母：私たち小さいときこれ履いて

(中略)

市嶋：小さいとき履いてた、

母：まだこういうふうに、今みたいに、ゴム長靴なんかないとき。うん。

ポー：かわいい。

母：うん。

牲川：うん。小さい、

サラ：ふふ。

母：子どもの、これ全部稲のほら、藁からとった。

牲川：うん。

市嶋：冷たくないですか。

牲川：うんうん。

母：ほかほか。

市嶋：あ、ほかほかなんだ。

牲川：ふーん。

母：ま、古くなって来ればやっぱり水入らして・・・

(中略)

リン：うん。

牲川：ふーん。

母：雪の、雪の時、雪靴だ。

牲川・母：うん。

牲川・市嶋：民芸品。民芸品。

母：うん、これが民芸品。うん。

事例3で見たように、父は「民芸品」という言葉の意味を留学生達に説明するが、その意味が伝わらなかった。それを見かねて、母が、上記の事例4のように飾り用の小さな藁靴を持ち出し、自身のエピソードを交えながら、説明しはじめた。留学生達は、実物を目にして、感嘆の声を挙げていることが分かる。さらに母は、藁靴は稲の藁から作ったもので、ゴム長靴が無かった時代には、自身も雪靴として使っていたと説明した。そして、古くなると水が入ってくることもあるが、靴の中はほかほかだったというエピソードも語った。このように、母は、藁靴の実物を見せ、自身が子供の頃に使用していたエピソードと結びつけて語ることによって、「民芸品」という言葉を説明していることが分かる。この一連の説明により、留学生達にとってなじみのなかった「民芸品」という言葉が一気に身近なものになり、留学生達の間で共有されていった。父が農業体験と物と言葉を結びつける調整行動を行っていたように、母は、自身のエピソードと物と言葉を結びつけて言葉の意味を伝えようとする調整行動を行っていた。このように、体験やエピソードと物や言葉を結びつけていく調整行動によって、留学生達の農業や農家の生活への理解が促進されていったと考えられる。

3.2.2 話題に関わる調整行動

話題に関わる調整行動としては、母語話者による「身近な話題の提供」・「話題への感銘」、非母語話者による「話題の修正」・「話題の提供」が見られた。

以下は、農業体験を始める前に、居間で雑談している接触場面からの抜粋である。

事例5 身近な話題の提供

父：昨日も、おとといかな、モンゴルの、と、映画が映画っていうかな、現実のあれを映したの、テレビで。それがね。野生の馬。

牲川：あ、馬。

父：・・・馬。

牲川：うん。

父：それをね、あの訓練してるんだね。

牲川：うん。

父：それをだんだんとその育てた、野生の馬を、あのなんていうの、命がけみたいな、ロープでばーっと投げて捕まえるわけ。

ユー：んーふ。

ここでは、父が、ユーの出身地であるモンゴルに関連する話題を提示しており、留学生達を受け入れるホストとして、留学生達と共有できる話題を提供する調整行動がうかがえる。他にも、このように父が留学生達に身近な話題を提供する場面が多々見られた。父は農業の知識や体験を教授するだけでなく、留学生達に身近な話題をふることによって、コミュニケーションの糸口を見出していた。この時点では、主に父が話題の主導権を持ち、談話を展開させていることが分かる。また、牲川や市嶋は相槌を打ちながら介入し、留学生達は、父の発話に熱心に耳を傾けていた。

事例6 話題の修正

ユー：But every, I can't do that. (笑)

牲川：あー。

市嶋：できない。

ユー：・・・can. It's like. Yeah, in Mongolia, there is a some people that.

牲川：あーできるの。

ユー：・・・Yeah.

(中略)

牲川：仕事ですよ。

ユー：Ah, not actually.

サラ：Traditional more.

ユー：Yes, it's like some,

市嶋：やりたい??

ユー：someone who wants to do that.

ユーは、父が提示したモンゴルの話題を聞きながら、所々で父のイメージを修正していった。事例5にあるように、父が、モンゴルで野生の馬を捕まえて飼育することがなされているという話題を提示すると、ユーは、自分は野生馬を捕まえて飼育することはできないと述べた。また、牲川が(野生馬を捕まえて飼育することは)「仕事ですよ」と述べると、ユーは、仕事というよりも、したい人がするものであると語った。このように、ユーが、父や牲川が語ったモンゴルについての話題を修正する調整行動を行っていることが分かる。その後、ユーは、さらにモンゴルのイメージを修正すべく、自ら話題の主導権を握り、新たな話題を提供していった。

事例7 話題の提供

ユー：In Mongolia, if I have horses,

牲川：うん。

ユー：My family had・・・20 horses like・・・,

サラ：Wow.

ユー：So,

牲川：え? そうなの?

ユー：Yeah.

牲川：20頭も。

ユー：But now, now I live in the city,

牲川：うん。

ユー：But, my summer house,

牲川：あー。

ユー：Yeah.

市嶋：へー。

牲川：別荘に。夏の家には？
ユー：So, that are usual thing.
市嶋：えー。
牲川：ほ、誰が世話してるんですか、夏の家馬。
ユー：んー, aunt.
牲川：あ、おばさんは
市嶋：ほー。
牲川：住んでるのそこに？
ユー：うん。
父：すごい。んー。すごい。
牲川：んー。
市嶋：へー。
牲川：普通なんだ、じゃあ、20頭
市嶋：んー。
牲川：馬飼うの。
サラ：(笑)

ユーは、さらに、自分達家族は都心に住みながら、別荘で馬を飼育しており、このようなスタイルも珍しくないと言及、母語話者側が語ったモンゴルの話題を修正し、新たな話題を提示する調整行動を行った。この間、父は、英語のみで語り続けるユーの話の腰を折らず耳を傾け、時折、「すごい。んー。すごい」と述べ、感嘆した。日本語での説明は牲川らの簡単な要約のみだったが、後述のように、父は、この話題の内容を自らに感銘を与えるものとして理解し、受けとめていた。

事例8 話題への感銘

父：みんなおんなじなんだけど、すごいな、日本・・・のよ、最初よかったんだけど最近弱くなったな感じするの、みなさんのより。だけどやっぱり、だから俺楽しみなの、みなさんところ会うのが。それでいろいろパワーもらってね。
牲川・市嶋：(笑)
父：バージョンアップしてね。
サラ・父・牲川：(笑)
父：よろしくね。
ユー：Yeah.
父：・・・いっぱいパワーもらう分、バージョンアップする。

父はユーの語りを聞いて刺激を受け、感心や感銘を含んだ喜びを示した。父は、留学生達に農業知識や体験を提供するという意味では、ホストの役割を担っている。しかし、父は常にホスト的な役割だけを担っていたわけではなかった。自身にとっては、理解しにくい英語で話されていたとしても、時に牲川や市嶋の通訳を介しながら留学生達の語りに耳を傾け、

その内容に興味や関心、感銘の気持ちを示した。また、父や母は、留学生達に、農業体験や自身の思い出のエピソードと言葉を結び、実物を示しながら、熱心に農業や農家の生活を伝えようとしてくれた。このような父と母の学生への接し方を参加留学生達は以下のように受け止めていた。

3.3 フォローアップインタビュー

農業体験活動に参加した、サラ、ポー、リンにフォローアップインタビューを行った。サラには、2013年7月4日、ポーには、2013年8月10日、リンには、2013年8月21日に、それぞれ実施した。インタビュー時間は、1人、1時間程度だった。なお、ユーについては、帰国のため連絡がとれず、インタビューを行うことができなかった。

インタビューの主な質問項目は、①農業体験で印象に残っていることは何ですか、②農業体験でどんなことが学びましたか、③農業体験で大変だったことは何ですか、である。以下は、インタビューの一部を抜粋したものである。

3.3.1 サラの事例—分からなかったのに良い気持ち

サラ：あの、ほとんどのこと、分からなかったんですが、でも、あー、時々、言葉、言葉を分からない時、あの一、ちょっと、不関心になってしまうんですが、その場合はそのことでありませんでした。分から、分かりますか？

市嶋：うーん、もう一度。

サラ：嫌だな気持ち、言葉が分からない時、嫌だな気持ちが出てしまうんです。時々、でも、その場合は、分からなかったのに、良い気持ちでした。

(中略)

サラ：うん。親切で、分からない時、時々、あー人たちはイライラになってしまうんです。その人たちは、全然、我慢、我慢してゆっくり説明しました。分かるまで。色々な形で説明しました。

3.3.2 ポーの事例—分からなくても気まずくない

ポー：話し、易かったです。やっぱりよく、笑顔とか、とても意味分からなくても、きまづいとは思わなかったです。普通に、なんか、分からなくてももう一回聞いて、ちゃんともう一回説明してくれました。

市嶋：あ、それはポーさんが分からない時に、何度、何回も聞いても、その度に説明してくれたってこと？

ポー：あーはい。

(中略)

ポー：本当に、あの農業のことを教えてくれたがり、はい、ますね。おじいちゃん(*父のこと)、はい、だから、とても、あったかい感じでした。

3.3.3 リンの事例—分からなくてもストレスはない

市嶋：(前略)あの一じゃあ、お父さんと少し何か話しましたか？

リン：〇〇（*父のこと）さんは、私はあまり話しなかった、と言った。
 市嶋：そうですね。なんかちょっと心配していましたね。うん、そっか。その時どうでしたか？
 リン：うん、何か話すのか分からない。
 市嶋：何を話していいか分からなかった。（中略）なんか農業のこととか話しましたか？
 リン：たくさん、名詞が分からなくて。
 市嶋：ちょっとストレスな感じがありましたか？
 リン：ありません。
 市嶋：あ、ストレスはない。
 リン：（笑）うん。

サラは、言葉が分からない時、「不関心」「嫌な気持ち」になってしまうが、父と母とのコミュニケーションにおいては、「分からなくてもいい気持ち」であったと述べている。また、ポーの語りからも農業体験中、言葉の意味が分からなくても気まずいとは思わせない場が形成されていたことが分かる。リンは、父に「あまり話さなかった」と言われたことを覚えており、また、「たくさん名詞が分からなくて、何を話すのか分からなかった」と述懐している。それにも関わらず、ストレスには感じはなかったと述べている。

サラ、ポー、リンの語りにも共通するのは、農業体験の場が、言葉が理解できなくても居心地の悪さを感じさせない、あたたかい言語活動空間であったということである。このような空間の形成が実現したのは、サラが「分からない時、時々、あー人たちはイライラになってしまうんです。その人たちは、全然、我慢、我慢してゆっくり説明しました。分かるまで。色々な形で説明しました」と述べているように、父や母が根気強く留学生達の話に耳を傾け、理解するまでゆっくりと説明してくれたことによると考えられる。このような父と母の態度は、「農業体験の文脈、物、言葉の関連付け」、「易しい言葉への言い換え」、「エピソード、物、言葉の関連付け」という調整行動として現れていた。また、ポーが「本当に、あの農業のことを教えてくれたがり、はい、ますね。おじいちゃん、はい、だから、とても、あったかい感じでした」と述べているように、父や母の農業を伝えたいという気持ちが留学生達に伝わっており、その熱意が「あったかい感じ」を生み出していたと考えられる。また、父は、農業体験中の言語活動において、日本語や農業の知識を理解させることのみを重視するのではなく、留学生達の話そのものも重視し、熱心に耳を傾けてきた。具体的には、「身近な話題の提供」・「話題への感銘」という調整行動を行いながら、留学生達と語り合ってきた。一方で、留学生も「話題の修正」をしたり、新たな「話題の提供」を行ったりした。このような調整行動を含んだプロセスを経て、気まずさやストレスを感じさせない環境が作られ、母語話者、非母語話者という境界を乗り越えた、互恵的な関係が構築されていったのではないかと考えられる。

4 固有の人生観を持った人間同士の接触場面空間

以上のように、意味に関わる相互調整行動においては、母語話者による「農業体験の文脈、物、言葉の関連付け」、「易しい言葉への言い換え」「エピソード、物、言葉の関連付け」という調整行動が見られた。このような調整行動により、学生達に「分からなかったのにいい気

持ち、気まずくない、ストレスがない」といった言葉の壁を感じさせない言語活動空間が作られていったと考えられる。

また、話題に関わる調整行動においては、母語話者による「身近な話題の提供」・「話題への感銘」、非母語話者による「話題の修正」・「話題の提供」が見られた。ここでは、母語話者が話題や知識を与え、非母語話者がもらうという関係性は崩れ、相互に話題や知識を交換しあえる互恵的な関係性が構築されていたと考えられる。事例で示したように、馬の話題が語られる際、発話の主導権は非母語話者であるユーにあり、その語り、母語話者である父に刺激や喜びを与えた。そこでは、日本語能力が絶対的な要因ではなくなり、話題そのものが重要視されていた。お互いが直接に理解し合うことのできない言語が使われたとしても、話題そのものに興味を惹かれ、相互に伝え合おうとする意欲があるならば、母語話者と非母語話者の相違を越えて、話題提供と理解が成立しうると言える。

母語話者である父の発話を見た場合、非母語話者に関連する話題提示、英語による語りを中断しないといった調整が見られ、非母語話者にも話題修正・提示の調整行動が見られた。そして、こうした調整が行われた二日間は、母語話者と非母語話者双方に大きな満足感を残した。このような言語活動空間は、父と母の、学生に農業を伝えたいという気持ち、学生の語る話題に興味を持ち、そこから学びを得ようとする意欲があったからこそ実現されたのではないだろうか。また、この言語活動空間は、牲川(2013)が指摘する仙北市西木町の農業従事者の、異質な他者を受け入れるための理念、他者認識に対する平等主義的な思想によって支えられていると考えられる。

従来の接触場面研究においては、優れたコミュニケーション方略をもつ母語話者は、外国人との接触経験の量・質が高い者とされ、母語話者の優れた調整行動についての教育対象化が目指されてきた。さらに、接触場面の実態を反映した支援や教材化の必要性も主張されるようになってきた(例えば、永山・武田・福永・土井2006)。また、多くの接触場面研究は、実験的な手法でその妥当性が主張され、コミュニケーションの方略化が目的とされてきた。一方で、本研究で取り上げた農業従事者である父と母は、外国人との接触経験は少なく、日本語教育学を専門としているわけではないにもかかわらず、留学生達に言葉の境目や気まずさ、ストレスを感じさせることなく、「あったかい感じ」をつくりだすことを実現した。OHRI (2005)の問題提起した、母語話者と非母語話者という境界性、非母語話者の会話からの排除を感じさせない対等な関係性に基づく環境は、外国人との接触経験が決して多いとは言えない、農業従事者の自然接触場面において実現されていた。自然接触場面においては、予想のつかない問題や出来事が多々おこる。どのような出来事が起こるのかを予想し、方略全てを網羅することは現実的には不可能であると言える。父と母が、「適切な」コミュニケーションの方略を熟知して、学生達とコミュニケーションをとっていたとは考えにくい。それでは、何が対等で互恵的な関係性に基づく言語活動空間の形成を可能にしたのか。それは、父と母の中に底流する、農業のプロとしての自信と誇り、非権威的な人間観、他者に対する不断の興味、これら父と母の人生観そのものがコミュニケーションに反映され、留学生達が「いい気持ち」でいられる「あたたかい」言語活動空間の形成を可能にしたと考えられる。この空間は、母語話者、非母語話者という括りを乗り越えた、固有の人生観を持った人間同士の接触場面空間であったと言える。

言葉の教育に携わる者として、筆者は、自身の人生観をどのように教育現場に反映させ、教室環境を創造することができるのか、さらに、学習者達の人生とどう関わっていくことができるのかと考える。母語話者と非母語話者との対等かつ互恵的な関係づくりに資する言語教育とは、母語話者の優れた調整行動を教育対象化したり、コミュニケーションを方略化することによってではなく、父と母がそうであったように、自身の教育に誇りを持ち、人生観に裏打ちされた理念を持って教育に望み、学習者と互いの人生観そのものを問いあえるような日本語教育場面が構築されるようになって始めて実現されると言えるだろう。

参考文献

- OHRI Richa (2005) 「「共生」を目指す地域の相互学習型活動の批判的再検討－母語話者の「日本人は」のディスコースから」『日本語教育』126, pp134-143
- 岡崎敏雄・一二三朋子(1995) 「多言語・多文化共生のパーспекティブに立つ日本語教育の枠組と日本語教育における言語的共生化」『教育研究紀要 第41巻 第2部』中国四国教育学会, pp450-455
- 岡崎敏雄(2003) 「共生言語の形成－接触場面固有の言語形成－」宮崎里司・ヘレン・マリット(編)『ネウストプニーのインパクト』明治書院, pp23-44
- 牲川波都季(2013) 『農家に学ぶ留学生受入の思想と方法－秋田県仙北市西木町のグリーン・ツーリズム事例集』秋田大学国際交流センター
- 田中望(1996) 「地域社会における日本語教育」鎌田修・山内博之(共編)『日本語教育・異文化コミュニケーション－教室・ホームステイ・地域を結ぶもの』凡人社, pp23-37
- 永山朋子・武田誠・福永由佳・土井眞美(2006) 「接触場面研究を反映した日本語教育に向けて－留学生と日本人大学生の共同作業場面における「確認」の分析をもとに－」『日本語教育の新たな文脈－学習環境, 接触場面, コミュニケーションの多様性－』アルク, pp142-171
- ネウストプニー, J. V. (1981) 「外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』45, pp30-40
- 春原憲一郎(1999) 「学習者を支援するネットワークとは何か」『JALT日本語教育論集』第4号, pp52-55
- ファン, S. K. (1998) 「研究会「接触場面と言語管理」」『特別研究「日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成」会議要録』国立国語研究所, pp1-8
- 柳田直美(2010) 「非母語話者との接触場面において母語話者の情報やり方略に接触経験が及ぼす影響－母語話者への日本語教育支援を目指して－」『日本語教育』 pp13-24

付記

*本研究は、市嶋典子、牲川波都季(2013) 「接触場面におけるカテゴリー生成と変化のプロセス－母語話者と非母語話者の調整行動に注目して」日本語教育学会研究集会第8回東北地区(東北大学)を基に論文化したものである。なお、本論文は、共同発表者である牲川波都季の了承を得た上で、発表内容を大幅に修正し、論文化した。

*本研究は、「複言語・複文化能力理念再構築に関する基礎研究－農業従事者の異質性対応方略と思想」(科学研究費補助金, 挑戦的萌芽研究, 24652098, 研究代表者: 牲川波都季・研

究分担者：市嶋典子)による研究成果の一部である。

謝辞

いつも暖かく留学生を受け入れて下さり、本研究の調査にも協力して下さった秋田県仙北市西木町の農家の皆様に心から感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。